

# 「性の形」を作りだす

——村田沙耶香『星が吸う水』——

Creating “Forms of Gender and Sexuality”: Murara Sayaka's *Hoshi ga Suu Mizu*

黒 岩 裕 市

## 要 旨

村田沙耶香の作品には性をめぐる既成概念を崩していこうとするさまざまな試みが見出せる。本稿では『星が吸う水』（二〇〇九年）を取り上げ、鶴子という登場人物による、既成概念に絡め取られない「性の形」を作りだそうとする探求を考察する。鶴子の探求は自身の肉体の感覚に基づき、二元論的な性差の解体へと向かうものだが、それは梓という登場人物に見られる、性差を強調するポストフェミニズム的な価値観への問いなおしでもある。ただし、鶴子にもポストフェミニズムを支えるネオリベラリズムと相性が良いところがあるため、本稿では鶴子の探求が簡単には実現しない点にも目を向ける。一方で、性行為を通して「性の形」を作り出すという鶴子の探求も、性行為を行なうことを当然視する点では既成概念に基づいたものであるということをも、恋愛や性行為から距離を置く志保という登場人物と鶴子のやり取り、二人それぞれの語りにくさをたどりながら検討する。

## キーワード

村田沙耶香、ポストフェミニズム、クィア、ネオリベラリズム、語りにくさ

## はじめに

村田沙耶香の作品には、性をめぐる既成概念を崩していこうとするさまざまな試みが見出せる。<sup>①</sup>

たとえば、『トリプル』（二〇一四年）、『無性教室』（二〇一四年）、『消滅世界』（二〇一五年）などの作品では、現実世界の既成概念とは別の設定が持ち出される。『トリプル』では「三人で付き合うという恋人の在り方は、十代を中心に、ここ五年くらいで爆発的に広がった」、<sup>②</sup>『無性教室』では「私たちの学校では、「性別」が禁止されている」、<sup>③</sup>『消滅世界』では「毎年一回、12月24日、コンピュータによって選ばれた住民が一斉に人工授精を受けます。『…』男性は人工子宮を身体につけて受精します。『…』人工授精で出産された子供は、そのままセンターに預けられます。『…』すべての大人がすべての子供の「おかあさん」となります」というような設定を通して、現実世界の性の既成概念が揺さぶられ、その問題性が照らし出されることになる。

それに対して、これらの作品よりも数年前に発表された『星が吸う水』（二〇〇九年）、『ガマズミ航海』（二〇〇九年）、『ハコブネ』（二〇一〇年）では、現実の世界を舞台に、登場人物たちが性をめぐる既成概念と格闘しつつ、そうした既成概念には絡め取られない「性の形」<sup>④</sup>が探求される。その探求は真剣で切実なものであり、また、どこかで読者を脱力させるようなものでもある。この時期の作品の特徴は、「性行為の機会自体を拡張更新する方向」、<sup>⑤</sup>「読者それぞれが抱く「小説における女性のエロス」という従来のな紋切り型の概念を、破壊し刷新してしまう可能性」<sup>⑥</sup>などと評せられたり、「セクシユアリティにおけるオルタナティブを模索する作品群」<sup>⑦</sup>の一部として読まれている。

つまり、性の既成概念を「破壊」し、その先へと「性の形」を「拡張」し、「オルタナティブを模索」していくことが鍵になるわけだが、そのような模索がどのように、どれだけ展開するのかについて、本稿では『星が吸う水』（初出：『群像』二〇〇九年三月号、初刊：二〇一〇年）を取り上げ、考察する。

『星が吸う水』には鶴子、梓、志保という三人の女性が登場する。三人は大学時代のアルバイト先で知り合い、鶴子が二九歳になる現在まで関係が続いている。鶴子には武人という性行為を行なう相手の男性がいる。テキストでは鶴子に焦点化した語りが用いられており、前半は女性間のやり取りと、鶴子と武人のやり取りが交わることなく配置される構造になっている。後半では鶴子が梓と志保とともに近場の温泉に日帰りで行くことになる。その中で鶴子が既成概念に絡め取られない「性の形」を探求するのだが、本稿ではまず、梓と鶴子のやり取りに目を向けることから始めよう。

## 1. 「努力」と「女子力」

作品の前半では、鶴子の一人暮らしの部屋に、梓と志保がやってくることで三人のやり取りが繰り広げられる。労働環境の良くなかったレストランの店長を辞め、求職中の鶴子に対し、梓も志保も働いているのだが、三人の話の中心は梓の恋愛である（仕事の話はほとんど出ない）。部屋にやってきた梓の外見は、鶴子の目線で「梓の丈の短めのスカートからは、よく手入れされた綺麗な膝がのぞいていた」「梓の服装はいつもコンビニに並んでいる雑誌の表紙みたい」（二二―二三頁）と語られる。それは「向こう脛にはまだ仕事のとぎつけた傷や火傷の痕が残ってい

た」(二二頁)という鶴子自身の外見とは対照的なものである。

また、梓は酒を飲んでも「肌も、睫毛も、臉のグラデーションも完璧なまま」であり、ここでも「すっぴんで部屋着のような格好をしている鶴子のほうが、周りから見れば酔っ払いに見えるだろう」と鶴子との対比で語られる。このように「隅々まで整えられた姿」をつねに維持している梓ではあるのだが、それが「彼女にとって楽しみではなく防護壁」であることにも鶴子は気づいている(五五頁)。

梓の外見については、ビールと水道水しか鶴子の部屋にないことを踏まえ(鶴子は食生活にも気を配っていない)、梓が「身体に入れる水は、女を作る水なんだよ。そんなもの飲んでたら、あんた、どんどん女が下がるよ」(二七頁)と告げる場面がある。そこには女性の身体はつねに内側からも磨かなければならないという認識がうかがえるのだが、そのようにして「女を作る」先に梓が見据えているものは結婚である。

梓の結婚観は、武人のことに触れて、「その男は、責任とって鶴子と結婚する気あるの？ こっちが適齢期過ぎてから、あつさり捨てられたりするんじゃないの？」(三一頁)という言葉に表れている。「女は、自分をいかに高く売るかってことを考えないとだめなんだよ。対等なんて甘いと思う。女であることを利用しないと、こっちが利用されて終わるんだよ」(三三頁)という発言にも見られるように、梓は自身を「商品」であるかのようにみなし、自分を「高く売る」ことで適切な男性との恋愛と結婚へと到達することを目指しているのである。

結婚に関しても、梓と鶴子は対照的で、鶴子が結婚を意識している様子はない。梓には「都合のいい女」(三一頁)として武人に「利用」されているのではないかと心配されてしまうものの、「性欲排出以外にあまり興味のない」(二八頁)鶴子にとって、どこかに出かけることもなく、部屋の中で性行為ばかり行なう武人との関係はむしろ都合合

なものであったのだ。梓が恋愛と結婚に主眼を置いているのに対して、鶴子はあくまでも性（性行為）を重視している。さらに、鶴子は、自分の身体は男性向けの「商品」ではなく、あくまでも自分のものだという認識を強く抱いており、梓の「女は、自分をいかに高く売ってことを考えないとだめなんだよ」「女であることを利用しないと」という言葉にも「よく意味が理解できないんだ」（三三三頁）と応じ、「女は商品ということになっている」（一〇二頁）ために得られるメリットにも反発する<sup>(9)</sup>。鶴子は梓のことを次のようにとらえている。

梓にとって、結婚は一世一代の人身売買なんだろうな、と鶴子は思う。なので商品としての自分に傷がつかないよう、いつも努力しているし、なるべく高く売ってちゃんと未来まで相手に尊重されようと、今からしっかり土台を造ろうとしている。鶴子は、そういう梓がとても息苦しそうに見えるときがある。背中を撫でて、大丈夫だよと適当でいいよ、と言いたいが、その発言に本当に責任が持てるのかといえば、鶴子にはよくわからなかった。（五二―五三頁）

鶴子は梓にとっての結婚とは「一世一代の人身売買」に他ならないということを見抜くと同時に、「商品としての自分」を「高く売る」ために「努力」するという呪縛から梓を楽にしてあげたいという気持ちを抱く。だが、「梓にとっての大きな出来事を、自分も尊重するのが礼儀である気がして」（五四頁）、鶴子自身の気持ちを表明することに戸惑いを感じてもいる。

さて、この一節でも梓は「いつも努力している」と述べられているが、梓にはポストフェミニズム的な価値観が

見て取れる。ポストフェミニズムに関して、ここで確認しよう。菊地夏野はポストフェミニズムをネオリベラリズム的な社会状況を背景に、「フェミニズムを終わったものとして認識させ、フェミニズム的な価値観を周縁化し、それによってジェンダーとセクシュアリティの秩序を再編する社会状況」と定義する<sup>10</sup>。そして、ポストフェミニズム論の代表的な論者であるアンジェラ・マクロビーやロサリンド・ギルの議論を参照し、ポストフェミニズム的価値観の特徴を、「身体的資産として女性性を感受し、性的客体から性的主体へと変化することや、個人主義を前提として選択とエンパワメントに価値をおく世界観、そしてそのために自己監視と規律を身につけていくこと」とまとめ、そのような「新しい女性性」を取り巻くように「性的差異を再強化する言説が流行している」<sup>12</sup>と述べる。

こうした議論を踏まえると、梓が「商品としての自分」を「高く売る」ために、「隅々まで整えられた姿」を維持することに「いつも努力している」点は、日常的な「自己監視と規律」に基づいた「身体的資産として」の「女性性」の追求に該当するものである。また、梓は「女」という主語で自らを語ることが多く、「男」とは別のものという意識に貫かれている。梓にとっては、性差は絶対的なものとして君臨しているのである。一方で、ポストフェミニズムの特徴の中でも「性的客体から性的主体へと変化する」という点は梓の言動にはあまり見られない<sup>13</sup>。むしろ、この作品で性的主体性を前面に出すのは性(性行為)を重視する鶴子のほうである。ただし、次節で詳しく見るように、鶴子の場合には性的差異の強調には抵抗する方向で性的主体性を確立していく。

ポストフェミニズム論は英米のカルチュラル・スタディーズで進展したものだが、菊地夏野は日本におけるポストフェミニズムを考察するに当たって、「女子力」という言葉に注目する。そもそも「女子力」という「流行語自体がジェンダー化している」<sup>14</sup>点を踏まえつつ、インターネット記事やアンケートの分析から、「古典的な女性性を、改

めて、女性自身が身体化しようと努力するという「女子力」の規律訓練的側面<sup>15</sup>を指摘し、「美や家事能力の向上を目指して日常的に自発的に管理されようとする心身のあり方、内面性が「女子力」なのだ<sup>16</sup>」と論じる。そこには明らかにポストフェミニズム的な価値観との共通点があるのだが、『星が吸う水』にも梓の発言を通して「女子力」という言葉が持ち込まれている。

前後の文脈を確認すると、鶴子が美容院に三か月ほど行っていないということ聞いた梓は、「その長さだったら、もつとこまめに行きなよ。女子力が、ますます下がるよ」と発言する。それに対して、鶴子は「大丈夫、あたしそんなの最初からないからさ。ないものは下がらないよ」と返すのだが、梓は「彼氏がいるからって、手抜きしたら、ますます雑に扱われるよ。女を捨てた女は、自分が捨てられることになるんだから。鶴子は、ほんと、油断しすぎだよ」（二〇五—二〇六頁）と畳みかける。鶴子は「女子力」について「最初からない」ために減ることもないと言うのだが、梓は「手抜き」したり「油断」したりすると下がるものであるため、つねに「努力」が必要だと認識している。ここに「女子力」の規律訓練的側面<sup>15</sup>がうかがえる。ただ、梓が言う「女子力」とは外見に関わるものばかりで、少なくとも鶴子たちとの会話において、気配りや家事能力の話は出てこない。

「努力」によって（外見に関する）「女子力」を高めようとしている梓ではあるが、交際している男性とはうまくいっておらず、結局、別れることになる。そうすると、梓は「やっぱり、女の価値は鮮度なんだ。いくら努力してもさ、あたしはもう、このまま売れ残ってくんだよ」（二一七頁）と言ひ、「女はさ。誰に見初められるか、なんだよ。平安時代とかから、もうずっとそういうもんじゃん」「どんな男に見初められるかで、女の価値が決まるんだよ」（二一八頁）と続ける。梓の発言では「商品」としての「女の価値」が「男に見初められる」と結びつけられ、し

かもそれが時代を超えて普遍的なものであるかのように語られている。ここからは性差の強調が、男性中心主義と異性愛主義と一体になっていることが確認できるわけだが、鶴子はこのような梓の考え方にも強い違和感を抱く。

梓と鶴子の恋愛観・性愛観の違いは、地球との性行為をめぐって如実に表れる。地球との性行為とは、「地球の性器」（九三頁）との結合によって「素晴らしい力」（九〇頁）が得られるという詐欺サイトの文言に、梓の会社の友達が騙されたという話の中に出てくる。

梓は冗談めかして、「大体、地球って、男なの、女なの？ それによって違ってくるじゃん。抜け落ちてんだよ肝心なことが」「そもそも大きさはどうなってんの。もし男でも、入らない大きさだったら無理だし。そこが駄目だったら、本当にそんなものがあったても、セックスなんかできないじゃん」と言う（九二頁）。ここからも梓にとっての性行為とは性別二元論と異性愛主義を前提とし、性器の挿入が不可欠なものであることがうかがえる。それに対して、鶴子は次のように述べる（以下、梓との会話である）。

「……性器の大きさがもしさ、直径一キロとかあっても、二人だけのやり方を開発すれば、セックスはできるんじゃない？」

「開発？ そんなもん、入れるか入れられるかでしょ。とにかく、男性器か、女性器かもわかってないのに、聞いただけって言うてんの」

「どちらでもないんじゃない？ ペニスの形でもヴァギナの形でもない、地球オリジナルの性器なんじゃない？」

（九三頁）

鶴子は「男性器」にも「女性器」にも当てはまらない「地球オリジナルの性器」の可能性を示唆し、その「オリジナルの性器」との「二人だけの」性行為の方法を「開発」という発想を提示する。こうした発言に鶴子にとつての「性の形」の探求の仕方が見て取れる。次節で考察しよう。

## 2. 「制作中」の「性の形」

鶴子は自身の性的な感覚を「勃起」や「抜く」といった男性の肉体に用いられることの多い言葉で表現する。武人との性行為でも、「武人は、とにかく勃起したペニスを刺激するために無邪気に身体を動かすだけなので、同じように、抜くことを目にかけてひたすら足の間をこすり付ける鶴子とは相性がよかった」（二〇頁）という一節があり、「同じように」「勃起」し「抜く」という点で鶴子と武人の類似性が示唆される。とはいえ、鶴子は自身の器官を一貫して「突起」と呼び、「ペニス」とは一線を画している。つまり、男性の肉体に近づくというわけではなく、「自分が女だということが、だんだんと遠ざかっていく」（二一頁）、「自分の性別がよくわかんなくなる」（二五頁）というように、鶴子は性行為を通して、女性であるという感覚から離れていくのである。異性間の性行為でありながら、「異性愛」の既成概念からずれていくのだ。

さらに、「鶴子の性器には穴が開いているが、何かを受け入れたと思ったことは一度もない」（六六頁）という一節もある。それは異性間の性行為において男性に能動性、女性に受動性が自動的に振り分けられることへの抵抗感であるが、性行為だけではなく、武人と出会った日の回想でも、鶴子が武人を「持ち帰った」にもかかわらず、「お持

ち帰りされた」と受動的に解釈されたことに鶴子は違和感を表明している(六六頁)。「どんな男に見初められるかで、女の価値が決まる」と男性の能動的な役割と女性の受動的な役割を明確に区分する梓とは対照的である。このような鶴子の肉体の感覚に基づいた見解には、ポストフェミニズム的な価値観の特徴の一つである性的差異の再強化を問いなおす側面を指摘することができる。

ところで、鶴子は「抜く」という感覚を得ても、出された精液が見えないため、目に見える武人の精液を羨ましいと思う。しかし、作品の終盤では、「あれは只の見えない精液ではない。今まで三十年近くをかけて成長した肉体と幾度も対話し、小さな変化に耳を傾け、蓄積と放出を繰り返しながら丹念に作り上げてきたものなのだ」(二二五頁)と自分の「見えない精液」を肯定しようとする。ただし、肉体との丹念な「対話」を経て、「勃起」や「射精」という感覚を得たことで、鶴子にとつての答えが見出されたということではなさそうである。女性に対して「勃起」しないのかと武人に問われた鶴子は、次のように答える。

「そのうちそういう相手と会うかもしれないし、会わないかもしれないし、わかんないんだ。あたしの性指向はまだ作り途中だから」

「え、何?」

「だから、異性愛か両性愛か、まだ制作中ってこと」

「そっか」

武人はぼんやり天井を見たまま呟いた。

「そういうのって、俺、元からあるものかと思ってたけど。作ってくもんなんだ」

「一生かけて、調べたり、探したりして、作りだしていくものなんじゃないの？ 調べもしないで、自分は男にしか勃起しないとか、決め付けたくないんだ。怠慢だと思う」(七四―七五頁)

鶴子は自身にふさわしい「性の形」とは「一生かけて、調べたり、探したりして、作りだしていくもの」であり、「作り途中」「制作中」だという言葉が示すように、現時点ではその途中にあるととらえている。それは「元からあるもの」というように、性的指向を本質的、固定的に決定されているとみなす見解に対する反発でもある。

肉体との「対話」によって作りあげた、鶴子自身にとってははっきりとした「抜く」という感覚ではあるのだが、精液が見えないため自己の感覚を他者に説得的に語れないことに鶴子は苛立つ。「夢精」という感覚を得た際にも、「性の理論にまだ汚されていない絶頂、儀式としての性行為のどこにも組み込まれていない絶頂」(六八頁)を「誰かに知らせたい気持ち」(六七頁)を抱く。だがその一方で、「凝り固まった性概念の一部とされる」(六九頁)ことを忌避し、「絶頂は、それ自体がいくら無垢なものであっても、外気にさらした瞬間、あつという間にいろんな理論や、脳から生えたねばついた手が伸びてきて、汚されてしまう。だから鶴子は自分の夢精を守ろうと思った」「あたしの絶頂はあたしだけの物だ」(七〇頁)というふうには、「凝り固まった性概念」によって自身の「性の形」を勝手に解釈されることを防ごうとする<sup>17)</sup>。

このように、鶴子は自身の肉体の感覚を話したいという気持ちを抱きながらも、容易には話せないという気持ちを同時に持つことになる。「説教癖」(二二六頁)があるという鶴子はそもそも口数が多いのだが、「性の形」に関する

ることは、「凝り固まった性概念」のもと、語ることの困難に直面してしまふ。だからこそ、性行為だけに没頭し、「不自然にこちらへと立ち入ってこない」（一六頁）武人との関係は鶴子にとっては心地よいものであったのだ。<sup>18</sup> 飯田祐子が述べるように、『星が吸う水』には「語りにくさ」についての語りが丁寧に織り込まれて<sup>19</sup>いるのである。

自身の性的な感覚に基づいて性別二元論を問いなおし、結果的に異性との性行為を通して「異性愛」をかき乱し、異性愛主義を内側から切り崩していくこと、あるいは、性的指向を固定化するのではなく可変的で流動的なものとしてとらえること、そして、「凝り固まった性概念」とは別の「性の形」を作りだそうとすることといった鶴子の探求は、クイア理論の取り組みとも共通するものである。たとえば、「クイア」を「安易な二項対立を認めない横断的思考や横断的現象」と定義し、「異性愛や同性愛に対する見方を変え、両者を変貌させる未来を見せてくれる」<sup>20</sup>ものとする大橋洋一の説明とも重なるところが大きい。

こうした鶴子の探求にとって、前節でも言及した地球との性行為をめぐる梓とのやり取りはクイアな気づきをもたらすものである。「地球オリジナルの性器」との性行為のやり方を「開発」する可能性について梓に告げた鶴子は、同時に次のような思いを巡らせる。

本当は、この膝の奥にあるものも、自分オリジナルの性器だと思っているが、それはうまく言葉に出来なかつた。地球の性器というものを想像しながら、鶴子は気付いた。自分は、大きく分けてたまたま二種類の形に分類することも出来なくはない、というだけで、性器というのはそれぞれ、一つずつ異なつたものであるような気がしているのだ。あたしのは男性器でも女性器でもない、ただの性器だと、自分は思っているのだ。（九三頁）

「地球の性器」だけではなく、また、鶴子自身の性器にも限定されず、それぞれの人間の性器は「オリジナル」なのである、言い換えれば、男性と女性という二元論的な性別の意味づけを脱した「ただの性器」に他ならないという気づきを鶴子は得るのである。だが一方で、鶴子はこうした気づきを、(直接的には話し相手の梓に)「うまく言葉に出来なかった」。ここでも既成概念が鶴子の発言を抑制していることがうかがえる。

さて、ここで改めて確認すると、鶴子のクイアな気づきは二元論的な性差の解体へと向かうものであり、その点では性差を再強化して語るポストフェミニズム的な価値観に挑む側面があった。しかし同時に、性差を解体した先にある、自分自身の「性の形」を作り出すこと、作中の言葉を借りれば、「それぞれが自分の性的嗜好にあわせて、特別な性感帯を作る」(九六頁)といった発想を、創造性 $\parallel$ クリエイティヴィティととらえるならば、それはポストフェミニズム的な価値観を支えるネオリベリズムが言祝ぐものに近づく。

もちろん、クリエイティヴィティといっても、「流動的でフレキシブルで起業家精神に富んだ市場文化の創成を目標とすること」や、「グローバル化を前提としたなかでのコンテンツ産業、クリエイティヴ産業の振興を重視すること」<sup>(21)</sup>といったネオリベリズムの特徴に、鶴子の発想がそのまま当てはまるわけではない。しかし、ネオリベリズムは狭義の経済や政治の実践に限定されるのではなく、社会や文化、人びとの価値観に広く浸透し、その思考を方向づけるものであるということ想起すれば、鶴子の発想にもネオリベリズムとの接点が見出せるのである。

このことはさらに、近年、クイア理論との関連でも議論されている。クイア理論の変遷をたどりつつ、クイア理論がその原動力としてきた「既存の規範を攪乱し、組み替え、変容させていく可能性」としての「柔軟性」「流動性」「可動性」が、ネオリベラルな資本主義経済体制でもまた「より望ましく優れた特質として特権的な地位を与え

られてきた<sup>(2)</sup>ということに再注目する井岸真紀子の議論を踏まえると、鶴子の発想とネオリベリズムとの重なりはより明確に浮かび上がってくる。ネオリベリズムは浸透度が大きいため、ある側面でのネオリベリズムへの抵抗——『星が吸う水』ではポストフェミニズム的な価値観への問いなおしという形で見られる——が、別の側面ではネオリベリズムとの共犯関係に陥ることがしばしば起きるのである。

そのうえで、本稿で改めて目を向けた点は、鶴子が「作り途中」「制作中」と言っているように、『星が吸う水』では「性の形」を作りだすことに到達しているわけではないということである。しかも、「それぞれが自分の性的嗜好にあわせて、特別な性感帯を作る」といつても、梓や志保にも鶴子の発想はうまく伝えられていない。

作品の終盤で恋人の男性と別れた梓が「どんな男に見初められるかで、女の価値が決まるんだよ。あたしはそれどころか、返品くらったわけだけどね」（一八頁）と嘆いたことに対して、鶴子は梓を締めつけている「凝り固まった性概念」を崩すために、「あたしは地球とセックスする。それを梓に見せたい。梓の中にある辞書の、セックスという言葉の意味を、一度だけ、崩壊させたい」（二〇頁）という思いを抱く。そして、「梓も作ればいいんだよ」（二二頁）と言いつつ、温泉施設の小さな庭園の砂利を「地球の性器」に見立てて、砂利に指を差し込み、手で掻き回すことで地球との性行為を「開発」し、実行しようとする。そのような鶴子に対して、梓は「鶴子のはさ、理想論なんだよ。現実には厳しいんだよ。あたしたちは、それと戦わないといけないんだよ。あたしには、鶴子がそこから目を背けて、夢みたいなこといつてるように見える」（二三頁）と返し、鶴子の「性の形」を作る試みは現実逃避として拒絶される。

こうしたやり取りだけをたどると、ポストフェミニズム的な価値観によって、鶴子のクイアな気づきや「性の形」

を作りだす試みが退けられたということになる。だが一方で、「凝り固まった性概念」を「攪乱し、組み替え、変容させていく」ことで新たな「性の形」を作りだすという発想もネオリベリズムと相性の良いものであったことを踏まえると、鶴子にとっての性の探求が、既存のものとは別の「性の形」を作りだすことを目指しつつも、そう簡単には実現するわけではないという展開は、ネオリベリズムには容易に回収され得ないものと解釈することもできる。そうした点では、「作り途中」というような鶴子の中途半端さは必ずしも否定的にとらえるべきものではないだろう。

### 3. 「只の星の欠片だつて思えば」

第一節と第二節では梓と鶴子に焦点を合わせてきたが、二元論的な性差を強調するのか解体する方向に向かうのかという点で二人は対照的であり、恋愛や結婚を重視するのか性行為を重視するのかという点でも違いはあるのだが、恋愛や性行為を行なうことを当然のこととみなしているという点では両者は共通している。その二人に対し、恋愛や性行為から距離を取るのが志保である。第三節では志保と鶴子とのやり取りに注目し、そこから鶴子の「性の形」の探求を問い返そう。

確認ではあるが、『星が吸う水』では鶴子に焦点化した語りを展開する。梓は自身の恋愛について、鶴子にもよく話するため、梓の発言はテキストにそのまま組み込まれることになる。鶴子自身は自分の「性の形」について、話したい気持ちとうまく話せない気持ちの双方を持ち合わせているが、他者に伝えることに難しさを抱えていても、鶴

子に焦点化した語りでは鶴子自身の感じ方やとらえ方もテキストには組み込まれることになる。一方で、志保は「あまり自分の深い話をするのではない」（四〇頁）ため、志保の発言がテキストに組み込まれることは少なく、志保の「性の形」はわかりにくいものとして提示されることになる。

志保が自分自身について話すのは、作品の終盤の温泉での場面である。合コンで同席した男性から鶴子経由で連絡先を聞かれた志保は、その男性の申し出を断り、自身の恋愛や性愛に対するあり方を次のように語る。

「私、恋愛感情や性欲を持たない体質なんだ。そういうのってすんなり理解されないから、できれば、説明せずに済ませたいの」

無という形の性的嗜好の存在を考えたことのなかった鶴子は内心意表を突かれていたが、湯を掬って頬を濡らしながら頷いた。

「そっか。まあ、元からアドレス教えない方が手っ取り早いしね、あいつ、なんか本気っぽいからさ、厄介だね」

「めんどくさがつてるわけじゃないよ。もし、本気だって言うならなおさら、向き合っちゃんと説明するのが礼儀だって思う。でも、正直に説明しても、わかってももらえないことのほうが多いよ」

「どういーうー」

「人によっては、自分が治すから自分とつきあおうとって聞かない人もいる。何もおかしくないのに、医者の治療を勧める人もいる。そういう人に説明するのって、本当に大変だし、嘘はつきたくないけど、大抵は、っ

かざるを得ない。だから、そういう機会を、なるべく少なくしたいの」

こんなに饒舌な志保を見るのは初めてだった。鶴子は思わず志保の白い頬を見つめた。志保の薄い茶色い目は少しも揺れずに宙を見上げていた。その静止した瞳を見て、鶴子はやっと、これは志保にとってカミングアウトなのだと気付いた。わざわざそうしなければいけないほど特殊なことではないと志保に思っただけで、鶴子はわざと、普通の世間話をしている態度を続けた。(一一二―一三頁)

志保の言葉をたどると、志保は「恋愛感情や性欲を持たない体質」であり、恋愛や性愛を行なうことを当然視する既成概念のもとでは「理解」されにくく、場合によっては「自分が治すから自分とつきあおう」といつて聞かない人や「何もおかしくないのに、医者の治療を勧める人もいる」ため、「できれば、説明せずに済ませたい」というのである。ここに志保の語りにくさが端的に表れている。

この文脈では性行為を通して「凝り固まった性概念」とは別の「性の形」を作りだそうとする鶴子も、性行為を行なうことを前提にしているという点で、「凝り固まった性概念」の側に位置するということになる。鶴子が梓には「上手く説明できない」(三七頁)のに対して、志保には「いろいろな喋ってしま」(四〇頁)のは、梓や志保の性格のためだけではなく、飯田祐子が「正常」の側にいる他者の無理解が「語りにくさ」を発生させる<sup>23</sup>と述べるように、志保に対しては鶴子が、鶴子に対しては梓が既成概念のほうにいる(「正常」の側にいる)という構造の問題でもあるのだ。

鶴子の「無理解」は、鶴子が志保の発言を「無」という形の性的嗜好」と解釈するところにも表れている。「無」と

とらえつつも鶴子はそれを「性的嗜好」という概念に乗せているのである（もともと、鶴子は梓のことも「恋愛をして愛情を受けて、セックスをする、そういう性的嗜好なのだろうな」（九五頁）と考えており、「性的嗜好」を拡大して解釈している）。

さらに、その後も、鶴子は新たな「性の形」を作り出すという自身の立場を志保に投影するかのように、「誰の性の形もそれぞれ特殊なのだから、志保の作ったその無という形の性は、少しもいびつではない」「なぜ、わざわざ作ったものを、志保が隠さなくてはならないのか、納得できなかった。とっておきのオーダーメイドのコートを着ているのに、既製品を着ている人に変だと言われているような、奇妙なことに思えた」（一六頁）と疑問を抱く。鶴子の疑問そのものは志保の「恋愛感情や性欲を持たない体質」をそのまま肯定したいという気持ちの表われではあるのだが、志保が「無という形の性」を「作った」のか、それは「とっておきのオーダーメイド」と言えるものなのかということとは志保の言葉としてテクストに組み込まれることはないのである。

ただし、鶴子自身も「性の形」を作り出すという試みを他者に伝えたいという思いと、伝えられないという思いの双方を抱いていたため、「カミングアウト」の語りにくさには敏感である。だからこそ、「なぜ、わざわざ作ったものを、志保が隠さなくてはならないのか」という疑問を抱いても、それを口には出さず、志保に無理に「説明」させることもしない。<sup>24</sup>「説明」や「理解」が求められることはなく、ズレを抱え込んだままで関係は続いていくのである。

鶴子と志保とのズレは『ハコブネ』との関連でも言及される「星の欠片」という発想をめぐっても見られる。<sup>25</sup>夜にサングラスをかけ、「ここは宇宙なんだから、暗いほうが普通じゃない？」と話す志保について、鶴子は「その横

顔を見ながら、ふと、志保は地球の上にいるという感覚があまりないのかもしれない、どこを歩いても、志保にとっては地球であるより先にここは宇宙なのかもしれないと感じた」（四二頁）という。一方、当の志保は、鶴子から「宇宙」（あるいは「空」）への関心について尋ねられた際に、次のように返答する。

「何でかな。ひよっとしたら、自分のこと、只の星の欠片だって思えば、その上の決まりごとのほうが、臚げなものだって感じられるからかもね。その感覚と地球の上のいろんな決まりと、どちらが幻想なのか、私にもわからないけれど」

志保の言っていることがよくわからなかった鶴子は、その顔をのぞきこんだが、志保は気付いていないのか、ぼんやり窓の外を眺めていた。（八四頁）

ここでも志保の言葉に目を凝らしてみると、鶴子が推測したような「地球の上にいるという感覚があまりない」というよりは、むしろ志保は「地球の上のいろんな決まり」を強く意識しているからこそ、その「決まりごと」の効力を「臚げなもの」と感じさせるために、自分自身を「只の星の欠片だって思えば」というアイデアを抱いているのではないか。とはいえ、「私にもわからないけれど」と締めくくるように志保自身も「星の欠片」というアイデアの効果をはっきりとつかんでいるわけではない。

先ほど引用した「恋愛感情や性欲を持たない体質なんだ」という志保の発言と考え合わせれば、ここで志保が言う「地球の上のいろんな決まり」には「恋愛感情や性欲」を持つはずだという既成概念も含まれるのだろう。した

がって、「わからない」ながらも、サングラスをかけたたり、「星の欠片」という発想を抱いたりすることは、志保にとっての「性の形」——「性」という言葉でくくることは不適切かもしれないが——の探求の試みであると言える。ただし、この段階では志保は自身のあり方を鶴子に告げてはいないため、鶴子も「志保の言っていることがよくわからなかった」ということになる。

さらに、地球との性行為の話にしても、そうした発想そのものに違和感を抱いているかのような志保は、「ひどいなって、思っただけ。商売のために、こんな嘘をついて、地球を性的な目で見せようとするなんて」（九六頁）と言う。一方、それを聞いた鶴子は、「志保は自分の住んでいる星を大切に思っているから、こういうのが許せないのだろうな」（九六頁）と推測するのだが、ここでも志保の思いは鶴子には伝わっていない。「たとえ本当にそんなものがあったとしても、性器には性を感じない権利だってあるでしょ。なのにわざわざ出向いてセックスしようとするなんて、乱暴だな」（九七頁）という発言のように、志保は「自分の住んでいる星を大切に思っているから」というよりも、特定の器官を——たとえそれを「性器」と呼んだとしても——性に結びつけ、性行為の対象にするような見方への違和感を表明しているのである。ここからも、「オリジナルの性器」という発想をしつつも、「性器」とは性行為を行なう器官であると自動的に解釈する「凝り固まった性概念」に鶴子がはまり込んでいるということが示唆されることになる。

このように、志保の数少ない言葉や鶴子とのズレに光を当ててみると、「凝り固まった性概念」に絡め取られない「性の形」を作りだそうとする鶴子の探求があらかじめ排除してしまうものが浮かび上がってくる。作品の終盤の鶴子による地球との性行為の試みにしても、性行為を中心化すること自体、志保が直面している既成概念への解決策

にはなり得ず、「私も、鶴子の言っていることは、理想論だって思うよ」（一二三頁）と志保は言うだけである。

おわりに

ここまで本稿では、「性の形」を作りだそうとする鶴子の探求を中心に、『星が吸う水』を読んできた。鶴子の探求は、自身の肉体や性行為を通して「自分の性別がよくわかんなくなる」という感覚に基づいたものであり、つねに性差を強調し、より適切な恋愛や結婚のために、日常的な自己監視のもと、「いつも努力」するという形で梓が内面化し、それゆえに自らを締めつけている既成概念を問いなおすものであった。それはクイアな気づきによるポストフェミニズム的な価値観への問いなおしとも言えるものである。ただし、「性の形」を作り出すという発想自体にもポストフェミニズム的な価値観を支えるネオリベリズムと相性の良いところがある。そのため、鶴子が「性の形」を作りだそうとしつつも簡単には作りだせないという点を本稿ではむしろ肯定的にとらえた。

一方、性行為を通して「性の形」を作り出すという鶴子の発想も、そもそも性行為を行なうということを当然視するという既成概念に基づいたものであることを、「恋愛感情や性欲を持たない体質なんだ」という志保とのやり取りから指摘した。特に鶴子と志保の語りにくさの違いに注目し、鶴子の「性の形」の探求が排除してしまうものがあるということを検討してきた。本稿のポイントをまとめると以上のようになるが、結びに代えて、『星が吸う水』の最後の場面にも触れたい。

作品終盤で「梓の中にある辞書の、セックスという言葉の意味を、一度だけ、崩壊させたい」という思いで地球

と性行為を行なおうとする鶴子の試みは梓にも志保にも「理想論」として退けられる。失意とともに、鶴子は自身が肉体との「対話」の末に作りだした「見えない精液」が目に見えれば、梓にとつての「セックスという言葉の意味」を「崩壊」させることができるかもしれないと思うのだが、まさに見えないものであるために他者に伝えることは難しい。そこでその「見えない精液」を見せる代わりであるかのように、尿意を我慢する梓に、鶴子は「女も立ちションできるんだよ」と言い、梓と志保の前で、かつて小学生の頃に試みた「立ちション」をしてみせることになる（二二七―二二八頁）。

作中で小学生の頃のエピソードは、「隅々まで整えられた姿」をつねに保とうとする梓の「努力」が「防護壁」に思え、そうした壁を崩したいができない「もどかしさ」（五六頁）を鶴子が感じたことと関連づけて回想されているため、「立ちション」の実演も鶴子にとつては、「性の形」の探求に連なるものだと解釈できる。とはいえ、それだけで「凝り固まった性概念」が「崩壊」するということにはならないだろう。梓や志保の反応が語られることもなく（ただし、梓も志保も強硬な拒否反応は見せてはいない）、いつの間にか、鶴子の足の間の尿は止まっていた。鶴子はその雨粒が、空が溶け落ちた欠片のような気がして、思わず下着から手を離し、宙に指を伸ばした」と、降り出した雨と鶴子の尿（鶴子の水」とも称される）が連動しているかのような一節があり、鶴子自身も「雨の染み込んだ身体」になるところで、作品は締めくくられる（二二八―二二九頁）<sup>(26)</sup>。

このような終わり方も、鶴子の「性の形」の探求という点では中途半端なものかもしれないが、鶴子が自分の「性の形」を「作り途中」「制作中」であると言っていたように、試行錯誤しながら行ったり来たりするような、さらなる探求を予感させるものである。「性の形」を作りだし、既成概念を崩そうとする試みに終わりはなく、つねに継続

的なものであるということが『星が吸う水』からはうかがえるのである。<sup>27)</sup>

注

- (1) 既成概念に関して、村田沙耶香は「私は女性性に限らず、既成概念が壊れていくような小説を常に書こうとしていると思います。当たり前のようにある凝り固まった概念を柔らかくしたいという気持ちが強いです」と発言している（松浦理英子・藤野可織・村田沙耶香・中上紀「文学と女性性」『すばる』二〇一四年一月号、二五二頁）。
- (2) 村田沙耶香『トリプル』（殺人出産）講談社文庫、二〇一六年、一二五頁。
- (3) 村田沙耶香『無性教室』（丸の内魔法少女ミラクルーナ）KADOKAWA、二〇二〇年、一〇五頁。
- (4) 村田沙耶香『消滅世界』河出文庫、二〇一八年、一三〇頁。
- (5) 村田沙耶香『星が吸う水』講談社文庫、二〇一三年、九五頁。鶴子は「性の形」を「性的嗜好」に引きつけているが、本稿では「性的嗜好」に限定せず、ジェンダーやセクシュアリティのあり方という意味で用いる。なお、『星が吸う水』からの引用は講談社文庫版（二〇一三年）によるもので、これ以降は本文に直接頁数を記す。
- (6) 栗原裕一郎「村田沙耶香と村田沙耶香以後―果たして「性」は更新されたか」『ユリイカ』二〇一三年七月号、一六〇頁。
- (7) 江南亜美子「無機的な身体―村田沙耶香と／のエロティシズム」『ユリイカ』二〇一三年七月号、一六六頁。
- (8) 飯田祐子「村田沙耶香とジェンダー・クィア―『コンピニ人間』、『地球星人』、その他の創作」『uncure』第一〇号、二〇一九年、五四頁。
- (9) 作中のエピソードとしては、「性欲の捌け口」（一〇〇頁）として、鶴子が男性の肉体を使ったのに、その男性のほうが「得したじゃん」と言われることに對し、「自分が女という性別であることを利用しているからだ」（二〇二頁）と鶴子が自省する場面がある。
- (10) 菊地夏野『日本のポストフェミニズム―「女子力」とネオリベラリズム』大月書店、二〇一九年、九八頁。

- (11) ポストフェミニズム論とは、ポストフェミニズム的社会状況を批判的に分析する論を指す。
- (12) 菊地、前掲書、九六頁。なお、「性的差異の再強化」の「再」については、ロサリンド・ギルによると、一九七〇〜八〇年代に男女平等や男女の基本的な類似性に基づいた言説が英米の大衆文化に根づいたのに対し、九〇年代以降、進化心理学や遺伝子科学を根拠とした性差を強調する言説が再登場し、大衆向けの読み物にも取り込まれるようになったことを示す。(Rosalind Gill, *Postfeminist Media Culture: Elements of a Sensibility*, *European Journal of Cultural Studies*, 2007, 10 (2), p.158-159)。
- (13) 菊地夏野は「女子力」の分析をもとに、「性的含意が前面に出ていない」(前掲書、八八頁) ことを日本のポストフェミニズムの特徴として挙げており、この点では梓と合致する。
- (14) 菊地、前掲書、八五頁。
- (15) 菊地、前掲書、八七頁。
- (16) 菊地、前掲書、一二三頁。
- (17) 鶴子は「自慰」に関しても同じような思いを抱く。「あたしの絶頂はあたしだけの物だ」という一節が示すように、それは自分の身体を既成概念から取り戻す試みである。
- (18) 社会と隔絶した空間で試みられる鶴子の「性の形」の探求自体も、ネオリベリズムの根本にある個人主義(個人化)や脱政治化と相性が良いものである。
- (19) 飯田祐子「〈語りにくさ〉を語ること―村田沙耶香を読む」『日本文学』二〇一七年一月号、九二頁。飯田が「彼女たちの文学―語りにくさと読まれること」(名古屋大学出版会、二〇一六年、一〇頁)で論じるように、「語りにくさ」を前景化するテキストとは、「呼びかけに対して滑らかに応答することに失敗した、あるいは抵抗したテキスト」であり、そこには「呼びかけにおける力学と個別具体的な応答性」が見出せる。本稿でもそうした力学に目を向けたい。
- (20) 大橋洋一「クイア理論「他」」(竹村和子編)『ポスト・フェミニズム』作品社、二〇〇三年、一九八、一九九頁。
- (21) 三浦玲一「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性―「プリキユア」、『タイタニック』、AKB48」(三浦玲一・早坂静編)『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クイア』彩流社、二〇一三年、六五頁。
- (22) 井芹真紀子「フレキシブルな身体―クイア・ネガティブイティと強制的な健常的身体性」『論叢クイア』第六号、二〇一

三年、三八頁。

(23) 飯田祐子「語りにくさ」を語ること」九三頁。

(24) 鶴子は梓の「性の形」についても、「自分にはうまく理解できない」(五四頁) だが、それでも「追求せず」、梓にとつての「大切な性の形」として「大事にしたかった」という(九五頁)。一方で、梓は鶴子に対して語りにくさを感じていないように、たびたび「強い口調」(三一頁)で助言する。ここにも既成概念が語りにくさを生じさせていることがうかがえる。  
(25) 『ハコブネ』には「星の欠片」という自己認識を持った知佳子という人物が登場する。知佳子も一見、性と無関係のように見えるが、地球との性行為を試みようとするため、かえって性の比重は大きくなってしまふ。さらに、知佳子は自身の「性の形」を他者に語ろうとはしないものの、『ハコブネ』には知佳子に焦点化した語りが用いられているため、テキストに知佳子の「性の形」は組み込まれることになる。この点も『星が吸う水』とは異なる。

(26) この点を確認しつつ、作品の冒頭に戻ると、そこにも雨の中、「雨粒」を貼りつけた武人が鶴子の部屋を訪れ、「武人の腕に流れる雨粒を、鶴子の熱っぽい手のひらが押しつぶした」(九一一頁) という一節がある。また、本稿の第一節でも触れたように、作品の前半には梓が「身体に入れる水は、女を作る水なんだよ」と言う場面がある。つまり、梓にとつての水は体内で「女を作る」ために活用されるものであるのだが、鶴子は梓の残したミネラルウォーターを「庭へ流し」、その水は「小さな穴をあけながら土の中へと吸い込まれて」(三四頁) いくため、人と人の間、人と大地(地球という星)の間を循環する水というイメージがテキストからは読み取れる。そうした循環も終わりが無いもので、鶴子の「性の形」の探求と重なるところがある。

(27) 「凝り固まった性概念」に絡め取られないような「性の形」も人びとの間に定着すれば、別の既成概念として機能しかねない。こうしたテーマは『トリプル』や『消滅世界』で扱われているが、その意味でも既成概念を崩す試みは継続的なものになるだろう。

